



TITLE:

ハーヴァード大學天文臺の此の頃

AUTHOR(S):

山本, 一清

CITATION:

山本, 一清. ハーヴァード大學天文臺の此の頃. 天界 1924, 4(45): 335-345

ISSUE DATE:

1924-09-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/160173>

RIGHT:

天 界

第四十五號

第四卷 大正十三年十月號

ハーブード大學天文臺の此の頃

山 本 一 清

(一)

ヤーキースや、リツクや、ウイルソン山や、かうした大天文臺を見た眼を以つて、ハーブード大學天文臺を見ることは、い
ろ／＼な意味に於いて興味が深い。人を魂消^{たまげ}させるやうな大きな望遠鏡があるのでなし、山嶺や廣原に遠く人の世を避けて、
唯、天の星と其の光りをのみ友とすると言つたやうな仙境でもない。更に又四方を見渡して誇るだけの眺望も持ち合せない。
いはゞ、濛々立登る現代都市の煙りに襲はれつゝ、又、電車汽車自動車などの騒々しさに圍まれつゝ、夜は又、街路や家々
の眩しい電燈の海に埋まりつゝ、大きな大學の一附屬館として存在を許されてゐるに過ぎない。歴史の古い新英州^{ニューイングランド}、首都ボ
ストンの中と言はず外言はず、千六百年代からの由緒を持つた名所舊蹟が頗る多い。ハーブード大學其のものも、米國に於
ける大學中の大學として、昔も今も多くの人々を惹きつけてゐる。——かうした盛んな文教の地に居て見るに、外觀に何の奇
も無い此の天文臺は、多くの場合に、一般遊覽客の注意を外れ勝ちであるのも無理とは言へない。——しかし、其れでゐて、
此のハーブード大學天文臺なるものが、其の専門的立場から見て、百呎や二百呎の大ドームを誇りとする大天文臺仲間と伍し
て、名を全世界にひびかせてゐるまいふことは、不思議なやうな一事實である。

(二)

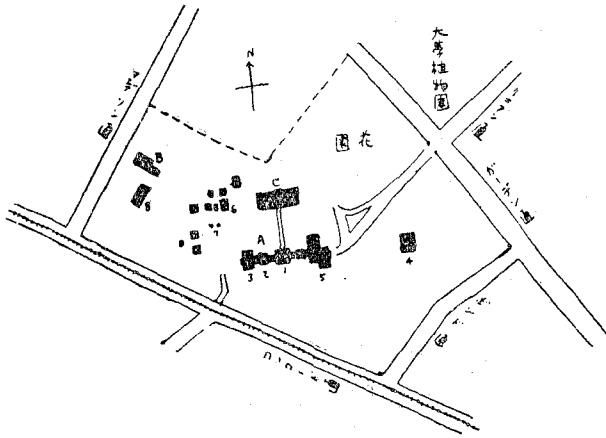
ハーブード大學天文臺(Harvard College Observatory)はケンブリヂ市の中央より少し西北寄りて、大學敷地から約半哩ほどの所

にある一つの丘陵を占めてゐる。丘の名は俗にサンマー・ハウス・ヒル(Summer House Hill)といふから、昔しは此所に誰かの夏期別荘でもあつたものか。今は其の丘の最も高い部に大望遠鏡室を置き此れに續いて大小各種の建物や機械室が並んでゐる。

建物の主なものは三つで、之れを、通常、A館、B館、C館と呼んで居る。其の中、A館が最も古く、實に一八四三年の建築其のまゝの、全部木造である。中央は樓上に十五吋直徑の屈折望遠鏡を置き、之れを中心として、東西へ左右兩翼が略々對稱的に續いてゐる。左翼には先づ子午環室があり、次には計算室がある。又、右翼は全部天文臺長の住宅となつてゐる。臺長住宅は、元、子午環室及び計算室と全く同じ形に出来てゐたものであるが、ピケリング臺長の時、同氏は私費を費して、大きな増築をやり、すっかり外觀を一變して了つた程のものになつた。

子午環室の子午環はレンズの直徑八吋、米國に於ける最初のもので、一八六八年にドイツ國より購入し、一八七〇年から歐洲諸所の天文臺と協同して星の經緯度を觀測したものであるが、此の事業が終るに共に、今は全部の機械が取り拂はれて、室は二三年前からは讀書室兼集會室と變つて了つた。幻燈裝置や天體模型などが並べられて明るい社交的の空氣がたゞよつてゐる。唯、昔の子午環の代りとして、毎日ワシントンから時刻報告を受けるために、輕便な無線電話の裝置が窓際の机の上に置かれてゐる。

計算室は、階上階下の二層になつてゐる。階下は歐米諸所の天文臺からの報告書が一ぱいにつまつてゐる、其の中で、今はエカンベル氏が變光星の研究をしてゐる。階上は主に氣象學的の圖書室であるが、其の一部が變光星觀測者會(A.A.V.S.O.)の事務室となつてゐる、誰かゞ、常々、報告を整理したり、光度曲線を畫いたりしてゐる。傍の壁には、年々總會の記念寫真などが懸けてあり、机の片隅には幻燈畫が幾百枚もなく散らばつてゐる。此の計算室階上の南向の一つの窓から、直徑十二吋の不動望遠鏡が天の南極の方角へ向けて、窓外に突き出てゐる。之れは名物の極軸望遠鏡で、夜間、觀測者は(冬ならば室温にあたゝまり



ながら)極めて樂に星を研究することが出来る。(但し、此の特殊な構造上、北極附近の天は見えないけれど) 計算室の階上の、尙其階上に小さなドームがあつて、中に六吋の望遠鏡が置いてある。するぶん舊式のものであるが時々観測も之で行はれる。但し、之れは石の臺に載つてゐると言ふわけでなし、又、自働裝置も無いので、大した仕事は出来ない。

(三)

A 館の中央樓上は此の天文臺全體の主部であつて、こゝに、前述した通り、十五吋の望遠鏡が納まつてゐる。僅か十五吋の器械が此の天文臺の主人公であるかと思ふに、他のものに比べて、情ない思ひもするが、しかし、之れには、實に他の如何なる望遠鏡も眞似の出来ない、貴い歴史が付いてゐることを思はねばならぬ。此の十五吋望遠鏡が出来たのは今を去る八十年の昔であつて、當時の露國ブルコク天文臺の十五吋と相對して、「世界第一の大望遠鏡」と呼ばれ、歐米の學界を驚かしたものであつた。そして、これによつて、初代の臺長ボンダ教授父子は、ヒペリオン(土星の一衛星)の發見、土星第三輪の發見、オリオン星雲や、ドナチ彗星の觀測研究、天體寫眞術の開拓的研究等を行ひ、一躍して、ハーヴード天文臺の名を世界的のものにしたのである。現代の批評眼のみを以て見るに、此の器械が總てが舊式で、御粗末で、ほんご一笑に付し去るほどのものに過ぎないけれど、學史上には特に貴重な寶物と言はねばならない。ボンダ教授が發明したといふ大仕掛な觀測用階段が此ドームの中に今もやはり置かれてある。——今日、此の十五吋は主にカンベル氏が變光星の觀測をやつてゐる。

十五吋のドームの階下は大きな圖書室になつてゐる。——いつたい此のハーヴード大學天文臺は米國最古の天文臺と言はれるだけに、天文圖書の多いことは決してヤーキースやリツクなぎの比でない。しかし、之れが餘り多過ぎるためか、整理が付かず、館内至る所、無秩序に近いまでに、書物が放置してゐるのは惜しいものだと思はせる。

(四)

B 館は、やはり、木造で、天文臺敷地の西北の隅にある。二階建であつて、階下は事務室や觀測時計室や暗室仕切られ、階上はキング助教授の室になつてゐる。

B 館には機械工場が続いてゐる。

(五)

A館とB館との間の地面には小さな觀測室や觀測臺が澤山並んでゐる。室は何れも木造の御粗末なもので、二十四吋反射式望遠鏡を始め、幾つかの寫眞望遠鏡が、一つ／＼此れ等の中に据えられてある。小さいながら好く活動するかの、一時のクック寫眞機も此の一群の中にあつて、晝はトタン箱をかぶせられてゐる。——此等の機械が、夜になれば、屋根を開けて、天空に向けられるのは言ふまでもないことであるが、しかし、此の多くの觀測室の中には、丸屋根を持ちながら、今は望遠鏡を納めて居ず、只、中はがらくたの物置きになつて了つてゐるのも二つ三つはある。

何だか、此のあたりの建物の様子は、(小さな室が散在してゐたり、又、皆が時代を経たものらしく思はれる點に於いて)、東京麻布の天文臺の氣分を連想させる。

(六)

天文臺の總ての建物が、ペンキで時代を、まかした木造であるのに對して、G館だけは煉瓦造なのが目を惹く。全部が三階建てで、可なりの大きさである。しかし之れも、やはり、實用一點張りの構へであつて、體裁から言へば丸きり落第だと言ひたい。それでも、此のC館が今はハーブード天文臺中の最も重要なものになつて了つてゐる。

『ハーブード天文臺が、只、昔しからの木造A館を持つただけで、しかも中に納めてある圖書や記録は年々共に山積せられ、之れが一朝火事にでも會つたならば、金錢にも代へられない貴重なものを烏有に歸して了はなければならぬ。——かうして前の臺長E.C.ピケリング氏は一八九〇年頃から切りに内外に訴へた結果、一九〇二年に至つて、此の煉瓦のC館が出来たのである。だから、始めから之れは記録保存といふこのみが建築の目的であつて、従つて、堅牢といふこの外には何事も考へられなかつた。外觀の振はないのは設計當初からの覺悟の前である。

ハーブード天文臺に取つて、最も貴重な記録と言へば、それは一八八〇年時代から毎夜撮り續けた數十萬枚の天體寫眞原板である。それで今日C館の中に最も大きな場所を占めてゐるのは之等の寫眞板を納めた數百個の棚であることは言ふまでもない。かうした寫眞棚の間々に机を置いて「うやく／＼しく其の番をさせて頂きながら」研究を勵んでゐるといふのが、此の天文臺の臺長始め多くの人々の仕事振りである。多くの書籍が整理もされずに、あらゆる室の隅々までも、置かれてある前に述べ

たが、しかし、寫眞原板の方は決して其んな虐待を受けてゐない。ミス・カノンといふ御大を大將として、幾人の人々が絶えず此等の数多い寶物の世話をし、二重にも三重にも帳簿を作製して、一生懸命振りに保護してゐる。壁といふ壁には非常の際の消火手順を張りつけ、それでも足りないを見て、今年の春以來、幾人の工作人が自動撒水管といふものを各室の天井に取り付けた。——かうして、總掛りで寫眞板を保護してゐるため、當天文臺に於ける天體の寫眞的研究は各方面に於いて至れり盡せりである。「何年何月何日の何星座の何星」と言へば、其の星の位置にしても、光度にしても、スペクトルにしても、欲しいものが僅か二三分時間の間に見出されるのである。

臺長シヤブレイ氏と、寫眞板監督ミス・カノンは此の館の三階に自室を持つてゐる。

(七)

ハーヴード大學天文臺には、平生、四十人ばかりの人が居る。其の中で主な人々は

H・シヤブレイ 臺長、ベイン講座教授

S・I・ベイリー フォリブス講座教授

E・S・キング 助教授、觀測主任

W・P・ゲリシュ 助教授、幹事

W・J・ライテン 觀測師

L・カンベル 觀測師

A・J・カノン(ミス) 寫眞板監督

ウヅ(ミス) 研究員、圖書係

モリー(ミス) 研究員

右の外の多數は、やはり、婦人である。そして、男も女も、或る數人を除けば、皆、老人ばかりである。現今第一の老人はベイリー教授で、今年滿七十歳。キング教授が六十三歳。ミス・カノン以下の婦人たちも皆六十歳以上の人々が多數である。そして、此等の人々が老人であるだけ、それだけ、今までに既に學問上の功績は立派なものである。例へばベイリー教授は星團

及び星團變光星の大家であり、キング教授は標準光度學の方面で世界的の名を擧げてゐる、カンペン氏は眼視變光星についての一大權威者であり、ミス・カノン^{Miss Cannon}は星の分光分類法の創始者であり、且、完成者として、全世界獨歩の地歩を占めてゐる、當天文臺の生きた寶物である。二年前、米國の一般婦人界の人物投票があつた時、ミス・カノンは十二億婦人の中に數へられた名譽を持つてゐる。ミス・ウヅは新星の發見者として、又、ミス・モリーは恒星分光學及び分光連星學上の功勞者である。かういふ人々は今既に功成り業を終へて、學界を退いても好い程の名を得た人々であり、又、それらの年輩でもある。しかるに、氣候のよ^うな^い此のニウ・イングランドの寒暑を厭はず、毎日天文臺に出て、若い人々を研究を競うてゐる——かうした白髪の老人だらけの中に、臺長シャブレイ氏が、之れは又思ひ切つて若々しい顔を出して、全體の研究を牛耳つてゐるのは、傍から見てゐる者に取つて一大奇觀たるに相違ない。シャブレイ氏は今年三十九歳である。聞くだけでも、此の青年學者が六七十歳の老男老女を號令してゐる圖が奇妙なものに想像されるわけであるのに、其のシャブレイ氏御當人が、更に、とても三十九歳は見へない程の若々しい顔付に生れつゐてゐるのだから面白い。お負けをしても、普通の米國人としては二十八九歳か、せいぜい三十歳までと思はれる程の若者である。之れが優に自分の父親母親と思はれる年輩の大學者たちを引きまわしてゐるのだ。

——讀者諸氏、よく此の圖を想像して見給へ。——そして、こゝに、始めて、ハーバードのハーバードたる所以があるのである。勿論、シャブレイ其の人が既に現今の天文界に於ける逸物であるには違ひない。シャブレイ氏は今日聲名噴々たるH.N.ラッセル教授の司配するプリンストン大學で學位を得た人で、其の後、一九一三年から一九二一年まで、かのウィルソン山の天文臺に移り、六十吋や百吋の大望遠鏡を用ゐて球狀星團研究に新機軸を出した人である。此の大研究の結論として、彼れは全宇宙の構造に言及し、總ての先輩學者を驚嘆させる程の新宇宙を提唱した。此の新論は學界に大きな反應を呼び起し、ためにシャブレイ氏は一躍して世界的大家になつて了つた。そして此の名聲を裏書きした事實は、即ち、彼れが故ビケリングの跡を襲ふて、此のハーバード大學天文臺長の位置に招かれたことであつた。此の事は、はやく、わが「天界」誌上に報導した。

但し、自分は、こゝで、シャブレイ氏の學績を、ベイリやキングやミス・カノンや、かうした元老たちの學績と比較して、其の優劣を言ふのではない。それは無意味な程愚な試みである。むしろ、見るべきポイントは別にある。——ハーバード天文臺の前の臺長E.C.ピケリングは米國の學界に於ける勇猛の闘士であつた。彼れが一九一九年に死んだ迄の前後四十有餘年間に、天文學上の新天地を開拓し、特に星の光度や分光學については、ハーバード天文臺をして世界的の權威ならしめた功績を何

人も否定することは出来ない。しかし、ピケリングが死んだあとには、天文臺に或は三十年或は四十年と長い間働き續けた老人ばかりが残つてしまつた。そこで天文臺の顧問會(此の中にプリンストンのラッセル教授があることを忘れてはならない)は思ひきつて、此の際、若いシャプレイ氏を聘し、天文臺の陣容を立て直して、新しい將來を計畫することにしたと見るべきである。そして此の氣分の中に、ハーヴードは今新運命を開拓せんぞ努めてゐる時であり、總ての臺員は、老若共に、シャプレイ氏を奉じて奮進してゐる有様は、實に學界の一佳話と言はねばならない。

(八)

八十年間にわたるハーヴード大學天文臺の歴史は、學問上に多くの誇らしいレコードを持つてゐる。今、吾々が此の天文臺の事を、親しく見る場合にも、又、傳へ聞く場合にも、是非其の貴い歴史を念頭に置かねばならない。

ハーヴードは今第五代の臺長を迎へたのである。創立當時は即ちウィリアム・C・ボンドが臺長でもあり、又、觀測者でもあつた。ボンド氏は元ボストン郊外のドルチェスターに住む一人の素人天文家であつた。家は親の代から時計師であつたから、其うした方面の知識は家庭に於いて見習ふたけれど、外には、大して學校教育を受けなかつた。それでも、幼少の時から其の觀察力と慧敏さは時々人を驚かしたといふ。ボンドは一八〇六年の夏の日蝕によつて天文趣味を覺え、其の後一八一一年には大熊星座を運行する一彗星を破見して、ハーヴード教授たちに認められるに至つた。ついで一八二三年頃にはドルチェスターの新しい自宅に觀測臺を作り、こゝで天文觀測をはげんだ。

一八四〇年の頃、ボストン地方の人々が多く天文現象に興味を持つやうになり、こゝに、ハーヴード大學に天文臺を創設する議が熱したとき、大學はボンドを招いて最初の臺長に任命した。此の時、大學天文臺は所謂デーナ館に置かれ。(此のデーナ館はハーヴード大學敷地の南東隅で、ハーヴード街とキンシー街との角の所に、今も建物は残つてゐる。)之れが一八四〇年の事である。

(九)

デーナ館にあつた天文臺は、四年の後、いよいよ今のサンマー・ハウス丘上の新館に移つた。其の時、直徑三吋の赤道儀が新たに購入せられて、一八四五——四六年頃の日蝕や水星經過觀測をやつたといふのだから、今の吾人から見て、當時の天文界が

如何なるものであつたかが想像される。ところが、一八四七年の夏に至つて、十五吋いふ望遠鏡が据えられ、こゝにハーブードは一躍して世界第一と稱せられることになつた。十五吋望遠鏡によつて獲たボンダ教授の最初の名譽は土星の第八衛星ヒペリオンの發見で、其れは一八四八年であつた。その他、ボンダは天體寫眞術や自動印時機クロノグラフを發明して、學者たちを驚かした。

(十)

ウイリアム・ボンダは一八五九年に死んで、其の子ジョジ・ア・ボンダが第二代の臺長になつたが、彼れは生れ落ちて既に天文家の家庭に育つたのであるから、父のやうに決して素人ではなく、臺長としては僅か六ヶ年就任したに過ぎなかつたけれど其の前、父の助手として觀測に従事してゐる頃から、多くの研究に成功した。即ち、彼れは土星の第三輪と十個の新彗星を發見し、又、オリオン星雲やドナチ彗星については綿密な觀察を試み、その他、天體寫眞術の研究、赤道星の子午線觀測などもやつた。

ボンダ父子のあとに、第三代の臺長になつたのはJウインロク教授であつた。彼れは、一八七四年まで、前後八年間此の天文臺を管理したのに過ぎなかつたが、其の間に、報時裝置を改め、又、新たに八吋の天子午環を歐洲より購入して、こゝに有名なケンブリヂの恒星觀測を始めることゝなつた等は特記すべき事である。彼の時代に、又太陽や地磁氣の連續觀測が始まり尙、日蝕のため數回の遠征も試みられた。

(十一)

第四代の臺長は、かの偉大なるE・C・ピケリング教授であつた。ピケリングは始めマサチューセツ工業學院の物理學教授であつたが、ウインロク教授の後を繼いで、ハーブード大學天文臺長に招かれた時、年齢わずかに三十歳であつた。當時、一物理學者を天文臺長に任命した事、彼れの若年なる事、が世人の或る一部の批評を招いたほどであつたけれど、就任後の素晴らしい活躍が總ての誤解を一掃した。ピケリングは、始め、天文臺の方針として、天體の光度測定に全力を注ぐことを堅く決心し、十五吋其他の諸機械を以つて、自ら實際觀測の先登に立つて働いた。一八七七年、かの火星の二衛星がワシントン天文臺の二十六吋によつて發見されるや、ピケリングは直ちにハーブードの十五吋を以つて、此の二衛星の光度を測り、星の大きさを推定したのは有名な話である。

一八八〇年頃から、ハーブード天文臺は漸次其の新しい方針を一般に認められ、同時に多くの研究資金を獲た。即ち、ベーチ、ドレーバー、ボイデン、ブルース諸氏の寄附による數十萬弗の巨金は、フイリプス、ペイン兩氏の提供した多額の經常費と共に、ピケリングによつて、天體物理學上の重要な基本研究に用ひられ、それが十九世紀の末年頃かな漸次出版發表せられて、ひろく學界を益することゝなつた。ピケリングは一九一九年に死したが、其の以前に既に彼れは恒星の眼視光度研究を終り、又、ミス・カノン等を助けて恒星二十餘萬の分光分類を結末に導き、又、キング教授等と共に恒星の寫眞光度標準を作つた今日、天文學上に於いて、星の光度ミスペクトルは總てハーブード天文臺の研究結果を最善の標準とするやうに世界一般が傾いて來たが、此れ皆ピケリングの先見と努力ミが齎したものである。

(十二)

今日在りのまゝのハーブード天文臺を見て、誰も一驚することゝは、實際の天體觀測といふ方面が振はないことである。まづ臺長シャブレイ氏が、ウイルソン山に居た頃は、隨分に觀測をはげんだ人であるに拘らず、今日は全く其れをやらない。十五吋望遠鏡はカンベル氏が可なり使用してはゐるが、決して多忙ミは言へない。二十四吋の反射鏡はキング氏が使ふ時もあるが一般には誰も使はないまゝになつてゐる夜の方が多い。晴れた夜、唯、常に忠實に仕事をしてゐるのは、一時のクツク寫眞機ミ、四吋の双玉機だけである。——かうした事情を、他の天文臺の活動ぶりミ比べ、又、光輝あるハーブードの歴史ミ比べて見るミ、一應は怠けてゐるかの如くにも思はれないでもない。しかし、これには幾多の方面から考へ合せなければならぬ事があるのである。

(十三)

第一、今日ハーブード天文臺が持つてゐる程度の機械を以つて、ピケリング氏が始め企てたやうな方面の研究は一通り片付いたのである。ために、今は、八吋の子午環は言ふに及ばず、大小の子午線光度計等も全く取り拂はれて了つた。又、ミスカノンの手許に整理せられてゐた恒星ミスペクトルの大ドレーバー表も全部出版済にならんミしてゐる。それに、ピケリングに代る新しいシャブレイ臺長が近く就任して、こゝに全天臺文の方針が新しく立て直されやうミしてゐる過渡時代である。臺長は新計畫に忙しい。例へば一九〇二年に購入して以來、用ゐられてゐなかつた六十吋の大反射鏡が將來微光星の光度測定に使

用される目的で、盛んに改造されつゝある。今二三年後にはハーヴードの夜の仕事は新しいプログラムを以つて進められるだらう。

(十四)

しかしながら、今日のハーヴードが決して全く怠業してゐるわけではない。此の天文臺は一八九〇年以來、南米ペルー國アレキバの地に有力なる出張所を持つてゐる、そこでは三十年來、二十四吋大反射鏡や十三吋赤道儀によつて、毎夜熱心な寫眞觀測が行はれてゐる。此のアレキバで撮影された寫眞原板が日々ケンブリヂに送られるのであるから、此等を調査するだけでも多數の人を要する。實際、今日ハーヴードにゐる四十人の研究者は殆んど此のアレキバ寫眞板の研究にのみ追はれてゐる言つて好い位である。

(十五)

他の天文臺に比べて、ハーヴード天文臺の經營ふりは一種特別である。之れは前臺長ピケリングの獨特な考へによるのであつて、即ち「天文臺全體は單獨の責任ある研究者が、成るべく多くの補助者を使用して研究を進める」といふのにあつた。即ち過去四十年のハーヴード天文臺は皆之れピケリング自身の研究のために、資金の許すかぎり多く設備と人々を使用したものであつた。故に、天文臺全體として、總ての人はピケリングの助手であり、ために諸研究は頗るよく統一されてゐた。従つて此の方針は幾分か臺長の專制に傾いたことはあるけれど、兎に角、ハーヴードは慫慂した特殊な經營方針の下に今日の名譽ある地位を得たのである。之れに反し、ヤーキースにしても、リックにしても、ウィルソン山に於ても、ほとんどの學制的權威を持つた多くの人々が同一の天文臺内に、それ／＼別々の研究をやつてゐることを、恰も群雄割據の如き有様である。之れに比べるミハーヴードの過去の方針は頗る劃一的であつた。――従つて、かうした天文臺は、臺長が變るに共に全體の方針が變更されるのは止むを得ない。

何と言つても、ハーヴードは頗る特色の多い天文臺である。

(十六)

ハーブード天文臺が新しいシャブレイ臺長を迎へて、今までの長い傳統から、今或る程度の方向轉換をやり始めてゐることは前にも述べた通り。此の過渡期の煩悶の中に、今一つシャブレイ氏の胸の中を往來してゐることは「天文の通俗化」といふことである。勿論、之れは天文研究の本質に關係するものではない。しかし、今までピケリング氏の下に長く天文臺が一般社會に没交渉であつた事が、シャブレイ氏の考へに合致しない或る理由があるらしい。——自分が昨年末、ハーブードへ移つて來た時、既に二種の會合があつた。一は「天文講演會」といふもので、平均二週間に一回づつ、天文臺員の誰かが種々の題の下に通俗講演をするのである。今一つは「天文談話會」といふので、之れは交るゝ自己の研究を發表する内輪の會の様でもあるが、事實は、新聞紙に廣告したりして、一般の人々も澤山やつて來る。そこへ、近頃から更に一種の會合が催されることになつた之れには日本の我が天文同好會が或る影響を與へてゐるらしいのだから面白い。即ち、去る一月の中頃、自分はシャブレイ氏と共に招かれてポストン市民クラブの晚餐會に臨んだ時の事、卓上演説を促された序でを以て、自分は、「日本に於ける天文界」といふ題で、實は同好會の創立以來の狀況を話した事がある。之れが以外にもシャブレイ氏を動かしたらしい。其の後一ヶ月半ばかり經て、二月の天文談話會に自分は又々「日本の天文界」と題して同じやうな事柄を講話するやうに頼まれた。此の時、シャブレイ氏は「會員一千數百人を持つてゐる天文の會は珍らしく、又、羨ましい次第であります」云々を挨拶した。するに其の後、間もなく、此天文臺の催しで三月から新しく「天文クラブ」といふものが始められた。そして、やはり、之れにも臺員の二人づつが交るゝ適當な題で通俗講話をするのである。

此の三種の會合は、嚴密に言へば、天文講演會がハーブード大學の催はしで、大學内外の人々に天文の通俗智識を普及するもの、又、天文談話會は天文臺の内輪の會、そして天文クラブは天文臺員の友人たちを招いて一夕の天文談をするといふ程度の社交會と言つた風に、それ々の區別があるべき筈なのだが、實際は其うした區別が殆んど無しに、何の會を開いて見てもいつも、同じ様な會になつてしまつてゐる。何れも新聞や大學週報に廣告する。又、會の日は臺員が總出で、望遠鏡で天體を見せたり、C館の第一階にある寫真陳列室を案内したり、幻燈入りの講演をしたり、會が終るに、皆が雜談を始め、其の最中に茶菓を食べたりする。——かうした會合が將來如何なる形に纏まるか、今豫言は出來ない。しかし、同好會みたいな會が一つ近い内に生れることは殆んど確かである。(一九二四・七二四、ハーブード大學天文臺にて)